

シユパン社會科學的概念構成の論理

岩 井 茂

内 容

一、分 析

- 一、概念構成が對象一般に依存すること
- 二、社會科學的對象の性質、本質概念と機能概念
- 三、認識論上より見たる本質概念と機能概念の區別
- 四、機能の概念
- 五、社會科學に於ける本質概念と機能概念との方法論的關係

二、歸 結

- 一、上に於て知り得たることの意味
- 二、機能概念の體系としての社會科學
- 三、心理學と社會科學との關係
- 四、社會科學に於ける歸納的方法と演繹的方法との關係

一、分 析

自然科学的、即ち因果論的な概念構成の本質は、現實體の外延的及び内包的の多様性を克服するにある。^(一) 然らば如何にして之を克服するかといへば、それは多くの事物からその共通の性質を抽出したる一般性と、一般的表象にしつかりとした限界付けを施したも、たる規定性 *Bestimmtheit* と、更に何處、如何なる時でも凡ゆる個々の場合に當嵌まる處の性質たる概念の妥當性とをその手段として之をなすのである。

(一) 吾々は茲に於てリッケルトの「自然科学的概念構成の限界、歴史科學への論理的手引」第二版の見解に従ふ。Rickert: *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. Eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften.* 2. Aufl. Tübingen, 1902. (本書の改訂増補第三第四版が一九二一年に出た——譯者附言)

若し概念の任務とする處が一定の多様性を克服するに在りとすれば、その概念の特性は或意味に於て、明かにその多様性の特質に、従つて又その對象の特質に、依繋してゐる。かくして物體界の一般的理論たる物理學は、例へば化學(即ち物理學が捨象した物質の性質を研究するもの)とは別個の任務を

有する（それは物理學はその概念に依つて化學とは異つた直觀的多様性を克服しなければならぬからである）し、又更に化學は生物學や記述的な有機體の學問（例へば生物學の如き——譯者附言）とは異つた任務を持つてゐる。實際之等學問の對象の區別とその學問上の概念の區別とは相對應してゐる。だから物理學に於ては凡ゆる物理學的事物の完全な概念は原理上法則概念であるのに——例へば重力の概念は重力の法則と同一であり、自由落下の概念は落下法則と同一である——、記述的自然科學にあつては現象の概念は一の分類概念に過ぎない。哺乳動物といふ分類概念は、一の生きた有機體に哺乳動物たるの性質を與へる様な、原理的合法則性をば未だ含んでゐない。反之自由落下といふことは實際、重力の法則の一特殊の場合なのである。

かく概念構成の特性にこの根本的な區別を來たす所以は、とり分けそれ等概念の對象に固有なる歴史的要素全體の中に存するのである。物理學にとつては全ての事物概念 Dingbegriffe は法則概念（關係概念）である（といふのは、物理學に在つては總べての過程が結局最後の動的部分——此の概念こそ物理學が考究するところの當の事物概念である——の研究になつて仕舞ふからである）のに、歴史的に規定された個體（例へば一定の有機體）をば研究すべき處のかの學問（記述的自然科學）の内部に於てはすべての事物概念をば法則概念たらしめやうなどといふ目的は未だ嘗て一度も樹てられたことはない兎に角一定の動物を分類するといふことは、生ける有機體の一般理論のみが獨り企て得るところで

あり、又その限りに於てのみこの分類概念が次の様な素質、即ち此の概念に依つて一定の個體を分類して得たる表徴をば同時に一自然關係の必然的な要素となす様な素質をば、事實上にも亦それ自らの中に含んでゐるのである。併し個體や従つて又歴史的な構造物を論ずると同じ様な調子で、最後の原理的な關係、換言すれば無條件的に普遍妥當的なをして定型的な性質を有する構造物を論ずることはでない。

(一)この「歴史的」historisch」といふ言葉は、以下に於ては勿論之を純論理的な意味に於てのみ用ひるのである。リツケルトは自然と歴史との論理的對立の特徴をば次の様に言ひ表はした、即ち「總べての經驗的現實體は、その現實體を自然として見る觀方の外に尙それとは異つた觀點からも見ることが出来る。そこでその現實體を一般的なものとして見れば自然となるし、特殊的なものとしてみれば歴史となる」と。(上掲の書二五五頁。第三、第四版一七三頁)

以上説明した處に依つて、一般に、一學問の對象中にある歴史的構成部分の内容がその學問の概念の理論的性質に如何に影響するかが明かになつた、が更に進んで一對象の歴史的構成部分の性質、更には對象一般の特性、尙その學問の特殊方法論的特徴をも此の説明に依り一緒に説明することができることとなる。かくして有機體界には生命の一般理論(生物學)の他に、その對象の分類以上にはあまり出なくつてもいゝ様な記述的な諸學問が要るのである。吾々は此の關係を以下に於て之以上論究

する必要はない。何故かといへば茲では唯、凡そ概念構成の特性が對象の特性に依存するといふことに就いて一例を示せば足るからである。かくして概念構成の特性に對して有する對象の特性をば研究することが認證論上常に可能であるといふことが證明せられてゐるのである。今や吾々は此の研究の方向を社會科學の方面に向けやうと思ふ。

二

上述せる如く社會科學的概念構成の稍細密な特徴は、社會科學の對象の特性を研究することに依つてのみ得られる。

社會科學の對象の特性如何——など云つてもこの様な問は全く漠然たるものである。何となれば茲に問題とされるのは社會的なるもの、Das Soziale即ち社會そのものの概念に外ならないからである。ところが周知の如く此の概念は之迄に未だ普遍妥當的な規定を受けて構成されるに至つてゐない。然かも之に加ふるに尙社會科學が問題とするのは價值關係の記述であるか、それとも因果關係の記述であるかの争、換言すれば目的論的な概念構成であるか又は因果論的(自然科學的)な概念構成であるかの争が仲々にやかましい。——尤も茲でその論争の渦中に投ずることはできないけれども、併し少くとも次の一事だけは之を述べて置かなければならぬ、それは吾々が社會科學的な概念構成は因果論的

なものであるといふ立場に立つて以下の研究をなしてゐるものであるといふことである。それはそれとして置いて、吾々は本論文に於て根本的な表徴を全部研究することはできないのであつて、唯社會科學の對象の特性にして、社會科學的概念構成に緊要なりと思はれる處のもののみを確立することを以て満足しなければならぬ。かくして此の研究は自ら、更に社會概念の構成に寄與することゝなるであらう——とはいふもの、今茲に於てはそれ迄論究を進めて行くことはできない事情にある。

そこで吾々は社會科學の對象の概念(社會概念)を分け様と思ふのであるが、之に際して、できるだけ普遍妥當的な、そして社會概念に就いての争にはできるだけ觸れない様な位置を占めたいのであるから、そこで吾々はその概念の中で問題になる様な諸表徴だけを無規定の儘に残し、そして之を研究の域外に放置する様にする。すると社會的なものといふ概念は次の様に分けられると思ふ。即ち、

一、論理的な構造から見た社會的對象、

二、社會概念に獨特の構成を持たしめるところのかの諸規定から見た社會的對象、換言すれば社會的なものの根本性質の特徴。

すべての社會概念の重心は此の後の規定(分類の二)の中に横はつてゐる、併し乍ら此の規定は未確定のものであり、又上述の如く吾々の研究に於ては最早重大な役目を演ずるものではない。

反之第一の規定はそれだけを獨立に考究することができる、——尤も之を純形式的に考察すれば、

第一と第二の規定はそれの實質的内容に於て一緒になつて仕舞ふ。(だが論理的には第一と第二の區別は何時だつて妥當しないといふことはない。)

然らば社會的なるものの構造如何といふに、その根本特徴は部分より成る全體といふことであるといはねばならぬ。

社會が部分より成る全體だといふのは、すべての社會的なるものが互に絡み合つてゐる構成素より成つてゐる一體系、即ち多數の部分單位が一緒に作用してゐるものと考へられるといふことである。

吾々に經驗的に與へられるところの社會現象——例へば「價格」、「市場」、「流通」といふ様なこと——は皆結局は最後の構成素、即ち個々人の行爲に分解されて仕舞ふ。假りに或社會概念にして孤立的な個人(ロビンソン、クルソー)の生活現象をも社會的な現象として考ふ可しと要求するものがあつたとすれば、此の現象に對しても亦、それをば部分より成る全體なりとして特徴付ける處の規定が當てまるのである。一個人のすべての行爲は之を澤山の構成素に分解して考へることができ、何故かといへばその行爲は事實部分行爲の一體系であり、然かも大部分は評價の體系であるからである、そしてこの評價相互の全關係はそこへ現はれて來る外的な行爲の規定性に依つて制約せられるのである。扱て社會とは部分より成る全體と解すべきものではあるが、然かも社會科學は社會現象をば二様に考察しなければならぬ。一は部分をば獨立に、別々の現象と見るものであり、他はそれを全體の部分と

見るもの、いはゞ一の機械の發動機の働らきをなす様な現象とか、一の全有機體の構成と生存に參與する現象、換言すれば機能^ををなす現象と見るものである。

かくして社會科學が用ひる概念にも二通りなければならぬといふことがわかつた。蓋しそれはかの二通りの觀方に應じて、個々の現象の概念も亦二通りになるからである。即ち第一はそれだけ獨立に部分として與へられたかの様に孤立的に考へられた現象に關するもの、換言すれば直接に與へられたもの、即ち之等個々の現象の規定性(本質)に關するものである。第二にはこの概念構成は部分が全體の部分として有する特性即ち、その部分の働らき、更にいひ換へれば、互に絡みあつてゐる個々の現象の全體系の内部に於てその部分が有する位置と意味とを記述するものである。

かくて第一の場合には社會科學的概念構成は個々の現象の規定性、即ち本質に就いて行はれるものであるが、第二の場合には共同に作用する體系の内に於けるそれ等個々の現象の關係、言ひ換へれば全體に於けるその機能、即ち全體に於けるその働らきに就いて行ふものである。従つて第一のものを指稱して、一社會現象の本質の概念といひ、第二のものをばその機能の概念といふこともできる。

このことを假りに價值現象に例を取つて説明しやう。この價值現象の直接の規定性(本質)を記述したものは(心理學的な)主觀價值説である。従つてこの價值の本質概念は心理學的な價值論の論ずるところとなる、何となれば價值を本質概念として見るときは、その關係(社會體の内に於る價值の機

能)が見られないで、その代り獨立に、だから又その儘に心理學的な現象と見られるからである。反之互に絡み合つてゐる價值現象の體系中の部分としての價值の性質——即ち價值の機能的な性質——を記述することは、心理學的な價值現象そのものとは別個の現象を記述することである。之は價值現象の社會學說であつて、これと同じことが經濟學では經濟的な價值論及び價格論として論せられてゐる。茲に於ては價值の機能概念が構成せられてゐるのである。

そこで吾々が社會科學的概念構成の特性は社會現象の本質規定と機能規定とを行ふ點にあるといふと、それでこの特徴が言ひ現はされるのである。斯くの如き二様の規定に依つて社會現象の完全な概念は得られる。

三

上記の如く本質概念と機能概念とを區別することは、認識論的——論理的な立場からは非難される。即ち認識論的に見ればすべての機能概念は結局本質概念と同種のものと考えられる、換言すれば、すべての機能概念は本質概念と同じ認識論的構造を有するのである。それは兎に角一事物の概念といふのは唯その事物の屬性の總體といふ謂に外ならぬ。だが併し「屬性」とか「性質」とかいつてもそれだけ獨立に存在してゐるものは何物もないのであつて、それは皆一事物の屬性に過ぎない、言ひかへれば

それ等の性質はお互が一の關連を作り、從つて又機能として現はれるのであるから、本來からいへば機能概念と本質概念とは認識論上一緒になつて仕舞ふ。そしてそれらの屬性を持つた本質とか事物とかのすべての概念(事物概念とか本質概念)が明からに、原理上は關係とか機能とかの概念(關係概念とか機能概念)になつて仕舞ふ。即ち終ひには凡ゆる關係は機能的(函數的)關係 „Funktional“-Zusammenhang であるといふことができる。例へば球面の大きさは半徑の大きさの函數であるとか、或は球面は半徑の大きさに依つて制約さるべき性質を持つてゐるといふ様なものである。

かくの如くにして屬性全部が總括されて一事物の概念となる、之は多くの條件がその現象に一の統一的な制約を與へるからである。若し吾々が事物——個體の現象を論ずるときには、若干の屬性(條件)がお互に或一定の函數的な關係に立つものと考へるだらう、即ちそれは一の相互依屬性となり、一の事物となると考へるだらう、(尙因みに云ふが、此の事は超越的な存在に歸着せしめなくつても、判斷必然性として規定することができるのである。)かくて此の相互依屬性が或關係に於て統一性と考へられ、一の統一的作用をなすとすれば、茲に現象の新規、獨立な因果的結合が現はれてくる、即ちその事物はその儘新たな關係の中へ入つて來る。此の新たな關係は之を獨立に記述することができる、そして事物を此の關係に於て記述したものはその機能的概念、即ちその事物が此の條件の複合體即ち事物と一緒になつて作用するところの働らきの概念に外ならない。そこで「事物」とは既

に諸條件(屬性)の合法的關係を總括したものであるといふことから考へて、此の(全體としての)關係を一の新たな關係となすところの至すべての性質はこの事物の機能なのである。茲に於てこの概念構成を認識論的に見て、それが本質概念の場合に於けると同じ特質を持つてゐるものであることは明かである。が兎に角こゝには機能の本質を述べたのである。依つて本質と機能との區別は元來認識論的に妥當すべきことを要求しないで、唯實際的——方法的に大なる意味を持つてゐるのである。蓋しそれは、機能的關係の概念は同時に亦本質概念でもあるが、併し乍らその概念は當該事物を新たな關係に於て記述するから、従つて、假令認識論上は不可能でも、その概念の特殊の位置が、方法論上必須のものである。その新たな關係こそその事物が大なる全體の中に於ける働きである。又此の新たな關係の記述といふことは正に社會科學にとつて特殊の意味がある、蓋しそれはかの關係そのものが社會科學の對象の構成に特別の意味を持つからである。

「要約すれば、「機能」と「本質」に關する吾々の研究は單に方法論的なものであつて、原理的——認識論的なものではない。夫れ故本質概念は發生的概念としても亦機能概念から區別することができるであらう。そは此の概念が原理上事物の根底にある條件即ち、此の事物の根基を指示するからである併し乍ら此の「發生的」といふ名稱は發生史といふことゝ紛ぎらほしいので、甚だ誤解され易い。だから「本質概念」といふ名稱を用ひた方がいゝ。

四

扱て社會科學に於ける機能概念と本質概念との關係を詳論するには、先づ働らきとか機能とかいふものそのもの、概念を詳細に考究しなければならぬ。

働らきといふ概念の中に於てはとり分け目的論的、要素を假定することができらるであらう。そして之を假定するとそこで一手段を用ひた成果、即ち目的といふことが問題となる様に思はれる。が併しさういふことはない。意識的な目的關係であらうと乃至は死せる機械論であらうとそれは兎に角、或關連の中に於ける一要素の働らきは單にその要素の因果作用なのである。家庭が社會體內に於てなす働らきは人口の更新といふことだといふのは、一の因果論的な記述である、又一の球の半徑の大きさを増すことは、その體積を増すことになるといふ考も全く之と同じである。そこで家庭が社會體內に於てなす機能、即ち働らきは人口更新といふことだといへると同様に、半徑の大きいさの働らきは體積の大きいさの一定の原因となるものだといふことができるのである。社會現象にあつては價值事實が中心問題であるといふことは此の研究の因果的な特徴を破るものではない。蓋し茲では目的の體系を論ずるのではなくつて、與へられた目的に對する手段の體系を問題としてゐるからである。従つて又目的關係を論ずるのではなくつて、その手段の(因果的)關係を問題としてゐるからである。目的、即ち人間の

最後の歸趣に就いての議論は抑々社會科學的のものではなくつて、哲學的のものである。

兎に角すべての機能概念の因果的な特徴は、吾々が上に述べた様に、機能概念が本質概念と認識論上同じであるといふことから生ずるのである。

五

扱て機能概念も本質概念も同じく自然科學的(因果的)な性質を持つたものであるといふこの證明に依つて、此の兩概念が社會科學的思惟の中にあつて有する認識論的——方法論的關係に就いての疑問に對しては既に或一定の論據が與へられてゐるわけである。併しかの證明に依つて得られた見解では少しも満足はできない、何故かといへば今茲に論究してゐるのはこの兩種の概念が社會科學上の問題に對して如何なる認識論的な働らきをなすかの問題だからである。

社會科學は社會全體の中に在る諸部分の關係を研究すべきものであることはわかつてゐる。だから第一に問題になるのは機能概念である。然らば今該「部分」の本質概念はこの機能概念と如何なる關係に立つのか。この際、部分が一の全體に對してなす働らきを記述することは、原理上はかの「部分」の特性、即ちその本質概念の智識に何等基く處はないといへる。蓋し本質概念が示してゐる處は唯、その關係を異にすればかの「部分」はどうなるか、即ち「他の場合には」それが如何なる特性を示して來るか

いふことであるから。併し乍らその部分の社會的機能の方を示す概念は「社會」といふ關係の中に於てのみその效能が現はれる。例へば家庭の機能概念は、愛の現象が社會體の中に於てなす働らきを示す即ちそれは愛の現象と他の社會現象との因果的結合關係を示すのである。之に反して家庭の本質概念は——之は一の愛情論であるが——如何なる條件でこの愛の現象が他の即ち心理學的な事項と結び付けられるかといふことを示すのである、従つて又この概念によつて心理學的な事項の中に於けるかの現象の特性がわかる。依つて此の概念は愛の現象が社會體の中に於てなす働らきに就いては何事をも言ひ表はしてはゐない、唯それは愛の現象の中に於ける一定の心理的要素が如何なる因果的な結合をなすかといふことをいひ表はすものに過ぎない。以下に於て此の事をもつと詳細に論じやう。先づ人口更新といふ現象(之をAで示す)は愛の現象(之をaで示す)の社會的機能として家庭の機能概念の中へ現はれてくる。即ちaはAといふ機能を持つてゐる、換言すればaの機能概念はAである。之に反してaの本質概念はその構成素 s_1, s_2, s_3, \dots の間の心理的關係としてのaの特性(例へば個人の性的及心理的特性)を示す。即ち若し吾々が男女間の事を心理物理的な現象として取扱ふと、そこに於て吾々は愛の現象(a)の説明がつけられなくなる、尤もこの此現象は社會的な事項として、即ち心理—物理的な事項とは別個の事柄として取扱はれる。心理物理的な事項としてみればaは s_1, s_2, s_3, \dots の制約を受けてゐるものと考へられ、社會的な事項として見ればaはAとなつて現はれる、併し乍ら結局に於

ては勿論何時も、 $a, a', a'' \dots$ の制約をも受けてゐるのである。

事情上述の如くであるにも拘らず、 $a, a', a'' \dots$ といふ條件は何時も妥當し、従つてそれは人口更新(A)といふ現象の間接の條件でもある、だが a は如何なる條件の許に立つか、従つて A は如何なる間接的條件の許に立つかといふことは、 A を記述したり、従つて又その機能概念を構成したりするには全然無關係なことである。社會科學の任務とするところは唯 A の條件を發見することである、即ち A をば社會的關係事項とか社會體とかの中に於ける一現象の活動と解することである。之が爲には勿論 a の條件を知ることが原理上不必要である(その條件を探る様なことは a をば社會的な事項とは解しない、でそれとは別な事柄だとして取扱ふものである)。

社會的事項それ自體の中に於て、「諸部分」がなす活動を研究する爲には、その部分が他の色々の事項に對してどういふ關係を持つてゐるかといふ様な事は原理上全然無關係なことであるが、何故之が無關係であるかといふ理由を吾々はよく知つてゐる。蓋し一の「部分」をその中に包含してゐる處の凡ての新たな關係はそれ自身一の因果的複合體であつてその規定性は原理上他の事項とは獨立なものであるからである。そこでこの本質と機能概念とが相互に對立してゐて全然無關係であるといふことは、社會科學の對象を研究するに際して、その要素の確固不變の一體系を問題とする場合に事實上完全に社會科學の内へ現れて來るのであらう。併し今は之をなすべきときではない。寧ろ茲に問題とす

るのは不斷に變化する要素の體系とか新たな關係の絶え間なき發展である。併し乍らくして同じ要素を含んでゐるところの別個の事項の特性を知ることが社會現象の變態を理解する所以となる、尤も之は之等變態の諸條件が社會といふ領域の外に、即ちそれと別個の關係の中にある場合に於てある。吾々は此の關係を補助科學的な關係と名附ける。

かくの如くにして本質概念は社會的複合體の構成要素がそれとは別個の關係の中に於て有する特性を示すものであるから、それは社會的機能現象の直接的條件の認識を媒介するものに外ならない。而して又之を認識することは社會的事項そのもの、研究に向つて、假令論理上は無關係なりとしても、純方法上又實際上には充分に價値あることである。之は一の補助學的認識である。吾々は上記の處に於て如何にしてAがその條件たるa(若しそのaが社會的全體の中の部分と考へられた場合に)と結び付くかといふことを述べた。併し乍らaが存在するとき再度それと結び付けられるところの條件は決して社會的關係事項の中には存し得ないものであつて、唯心理學的關係事項の中にのみ存するのである。依つて心理學的性質を有するaの本質概念はAに向つての一の補助學的概念である。

此の本質概念の方法上の(補助學的の)必然性から次の様な結論、即ち機能概念の中に在る處の(社會的)複合體の獨立な合法則性は之をその(心理學的な)「構成素」の合法則性から誘導し得るものだといふ結論を引出すことは到底できない。寧ろ之等全體の事項の諸法則はその「構成部分」の法則からは

誘導し得ないものであり、又従つて本質概念は上述の補助學的な役目のみを演じ得るものであつて、演釋をなす出發點となるものではない。この本質概念は新規に諸部分を因果的に結合する場合の歴史的的與件である。そしてこの與件は複合體より成る全ての新規の類(Gattung)の中にあつて原理上新たなるものであり、従つて獨立に取扱ひ得るものなのである。假令吾々が認識の理想を實現したと考へる場合でも、複合體の法則をその要素の法則に還元することは決してできない。逆にその構成部分を因果論的に考察する場合には何時もその複合體の(歴史的)與件はどこかへ紛れ込んで仕舞ふに相違ない、何故かといへばその「構成部分」を獨立に考究するといふことは、取りも直さずその部分を別個の關係に於て考究するといふことであるからである。例へば原子運動の法則がゲイ・リュサック・マリオート(Gay Lussac-Mariotte)の法則に對する關係は、恰かも前者が後者から直接に誘導せられたり、又後者の中に含まれてゐたりしてゐて、丁度その爲に前の法則が餘分のものであるかの様に思れる様な關係をなすものではない、何故かといへばゲイ・リュサックの法則は一の原始的事項を説いてゐるものだからである。社會といふ領域に於ても同様である。若し一の社會的複合體の構成素 a, b, c, ……をば他の色々の學問がその構成素の合法則性に従つて最も嚴密に理解したとしても、それでもその複合體たる A そのものに關し、即ちその複合體をして正に社會内の複合體たらしめるところの特殊の因果關係に關しては何事をも云はれないであらう。何故かといへばこの複合體の綜合状態といふものは

その複合體構成部分の合法則性以上のものであるか乃至は複合體に關する獨立の科學が抑々不可能になつて仕舞ふかそのどちらかになるからである。

勿論人によつては次の様に反對することもある、即ちゲイ・リュサツクの法則は物體界の一般的理論中の構成部分に過ぎない、だからそれは此の一般的理論に適合して、運動の根本法則と或關係に立つものでなければならぬだらうと。この事は勿論それ自身では正しい。併し乍ら物體界の諸要素が占める一定の位置 (Konstellationen) に就いての法則は之を最も普遍的な法則から誘導することは決してできない。何故かと云へば、一の新たな位置といふものは只一の歴史的與件によつてのみ可能であり、又従つて具體的、歴史的な妥當性及規定性の内部に於ける合法則性に依つて記述され得るものだからである。凡そAといふ複合體の特徴は、その構成部分たる a、b、c が如何なる關連状態を作つてゐるかを見ればわかるものであるとなすところの一の法則は全くその部分の方のみを重く視て云つてゐるのである。處が此の法則に依つて a、b、c が A を背負つて立つことになる、之等の構成部分は唯々それ等部分の關連状態を作つてその中へ A となつて現はれてくるのである、即ち更に諸の部分から成れる部分としてではなく、一定の結合をなすときの絶對的反應單位 (Reaktionseinheiten) として現はれるのである。何故かといへば a や b や c を成立せしめ又は變化せしめる處の法則が、かの複合體 A の法則の中へ入つてくる場合にはその關係は在來のものとはちがつて一の獨立な、即ち原理上新規

なものと考へられるからである。そこでAといふ複合體に關する法則を左右するに至るものは、Aといふ體系の中に變化を起す條件となるものとしてのaやbやcの意味といふ原理上新たなる與件であり、従つて又この關係事項全體の中に在る一の統一的因果的結合といふことである。この事項全體に渉る「新規な統一」といふのは、部分を新規に法則的に結合するといふことに外ならない、然かもその部分といふのは別様の結合をなす場合には勿論部分とか全體とかいふものにはならない（社會的な事項とはならない）ところの部分である。更に又次の様に云へる、即ちかくして部分たるa、b、c、「そのもの」（勿論此の部分は之とは別の事項の中にあつては、 $abrs\dots$ とか $abvz\dots$ 等となるであらう）を悉く科學的に理解しても、その部分が作つてゐる全體の事柄 abc （ $\parallel A$ ）に向つてその部分自身が有してゐる意味の片鱗をも傳へ得るものではないと、かくして前者（即全體の事項）をより特殊なものとなし、後者（即ち部分）をより普遍的なものと考へ、そして後者から前者を誘導することは不可能のこととなる。

二、歸 結

一

かくて吾々は機能概念と本質概念との認識論的、及方法論的本質と之等兩者の間の關係とを充分に解

明したのであるから、そこで吾々はかくて得たる認識は一體そのどちらに一層重要な関係を持つてゐるかといふ問題に論及することができるのである。此處ではただ次の點を論ずるに止める。

一、第一に起るのは社會概念の問題と密接な関係を有してゐる處の疑問であつて、それは特殊社會科學的概念は機能概念なりや本質概念なりやといふことである。

二、本質概念は大部分心理學的な構造を持つた概念であるから、そこで心理學は社會科學に對して如何なる關係を持つてゐるかといふ疑問が生ずる。

三、元來吾々の研究は社會科學的概念構成一般を闡明するに在るのだから、亦方法問題に就いても特殊の關係(第二項)を生じ、社會科學に於ける歸納的方法と演繹的方法との關係に就いての問題に對して無關心ではあり得ない。

四、社會科學的概念構成の特性が社會科學の對象の特性に依存してゐる處からして吾々の研究して得たる結果より、社會概念の性質に斷定を下すべき任務が生ずる。

この初めの三の關係を以下に於て簡単に説明しやうと思ふ。

二

第一に起る問題は、之等兩種の概念の中の一が社會科學にとつて本質的なもの、即ち特殊社會科學

的なものであるかどうかといふことである。之に對しては次の様に云へる。

即ち社會科學とは機能概念の體系であり、又その本質概念とはこの社會科學的思惟に向つての補助概念に過ぎないと。

此の答は、第一には上述した様な兩概念の認識論的な性質と、又それから生ずる處の本質概念と機能概念との補助學的な關係とに依り、第二には吾々が初めに行つた様な社會概念の分析に依つて基礎付けられるのである。

この本質概念と機能概念との認識論的な關係から、とはいへ但その關係の中に於て本質概念と機能概念とが原理上無關係なることが明かになる限り、吾々の立論が生ずるのである。元來本質概念といふのは或現象を別個の關係に立たしめたときそれを就いていへることなのである。かういふと、人々が、然らばこの別個の關係といふのは必然非社會的なものでなければならぬかと尋ねるのは當然である。併し、若しその人が次の事をよく考へるならば、上記の疑問は結局故なき事となる、即ちその事といふのは、社會的性質を持つた總べての現象は一の機能現象になつて仕舞ふが、併しかうなるといふことも最後に於ては、結局社會的な事項の中に於ては認めることのできない條件に依存してゐるものだといふことに否應なしにぶつゝかるといふことである。

併し乍ら吾々が初めに行つた様に社會概念をばこの部分、即ち部分そのもの作つてゐる關連状態と

此の関連状態を社會的なものと考へるときに現はれる特徴とに分けると、之に依つてとり分け明かに
なるのは次の様なことである。——即ちそれは、之等部分が正に現象であるといふことから考へて、
此の現象が社會的な關係事項と考へられる外に、尙別の關係事項とも考へられるといふことである。か
くして本質概念は必然的に、非社會的な事項と關係がある。夫れから此の概念は機能概念とは別の學問
に屬してゐるから、此の概念が機能概念に對する補助關係は、補助學的關係といふ意味を持つてゐる。
それとは反對に機能概念の方は、若し吾々がなした様な社會科學内の概念構成過程の分析が完全なも
のであつたとすれば、必然とは特殊社會學的概念なりと考へられる。

三

心理學と社會學との關係に就いての問題に遺漏なく答へる爲には、先づ總べての本質概念が心理學
的な性質を有するものなりや否やといふ別の問題からして決めてかゝらねばならぬだらう。だがそこ
迄研究の歩を伸ばすのはあまり範圍が廣くなり過ぎるからしない。併し、人間の行爲が社會現象の(間
接的)條件として論究される限りでは、明かに本質概念は心理學的特性を持つたものでなければなら
ぬ——ところで本質概念が社會科學的性質を有するものとした場合に、その概念が社會科學的概念に
對する關係はどうなるかといふことは之迄論じた處に依つて明瞭である、即ちその概念は社會的關係

事項の中にあるものと考へた現象が別の(心理學的)關係事項の中にあるものとして考へられた場合その現象が有する性質、従つてずつと背後にあるその現象の心理學的條件の性質をば明かにするといふ任務を果たすのである、本質概念はこの性質の解明によつて特に社會現象の變態、例へば凡ゆる病的な構造物を理解することを容易にし又は可能ならしめる。かうすることは一の補助學的な價値を有してゐるのである、そして認識論的な性質に就いては既に上の處で論述して置いた。従て社會科學的な學問は決して「應用心理學」たる性質を有し得るものではない。心理學は原理上、社會現象の本質概念のみを與へてくれるのであつて、機能概念とか社會科學的概念そのものを與へてくれる様なことは決してない。だから社會的概念は心理學的概念の單に分量的に異つたものだから、又はその變態だとか應用だとかいふことは決してできない。之等兩者には内面的の深い溝があつてそれに依つて互に區別せられてゐるのである。

之が完全に方法論的に區別せられるといふことは矢張り又「社會的なるもの」が「心理學的なるもの」に對して原理上新種の一現象であるといふことから生ずるのである。従つて一領域の概念は他の領域の概念と原理上は無關係でなければならぬ、そして唯互に一の外面的な補助關係にのみ立ち得るのである。

四

社會科學的概念構成の特性をかく解することは、社會科學内の方法論上の争に向つて如何なる意味があるかといふ問題に對しては、茲處でも同じ様に充分の説明を施すことはできない。けれどもその關係を少くとも二三の點に就いては研究しないではゐられない。

社會科學的方法の問題には二通りある。第一に此の方法問題の中で論せられるのは、社會的なるものを部分組織(例へば經濟とか法律など)に割り當て仕舞ふことの可否に就いての争であり。又それから生ずる方法の根本特徴のことである。此の方法の特性に關する問題は、當該社會的部分組織を構成する原理(例へば經濟といふ組織に就いて云へば「利己」といふこと)から演釋を行ふことが原理上可能なりやといふことを問ひ、又その他にこの演釋されたる社會的部分内容が全體的にして未分の「社會的なるもの」とが、社會的現實體とかに對する關係を如何に考ふべきかといふことを論ずる。——次に問題となるのは演釋的と歸納的との方法一般がどう關係するかといふことである(之は假令かの第一の根本的な方法問題が既に解決が付いたとしても問題になる)。

併し乍ら此の兩方の方法關係は之を別々に論ずることはできない。だから以下の處では、演釋的方法と歸納的方法との關係に顧みて、吾々が先きに知り得たるところからして唯二三の直接なる歸結を

相互に引出すだけにしやう。

社會科學的現象の完全な概念といふのは、一現象の機能概念と本質概念とを均しく含んでゐる様なものである。かくてこの完全な概念は個々の研究に於て演釋の出發點ともなり又歸納の先導ともなるのである。

そこで先づ第一に之を次の様に考へなければならぬ、即ち一現象の本質と機能とを根本的に理解することに依つてこの現象を社會的有機體といふ綜合體系の中に入れること——例へば經濟的とか法律的とかその他の現象の一團の内へ入れること——ができる様になるのだと考へなければならぬ。之に依つて、先きに研究された現象がかの綜合體系に對して有する凡ゆる關係が明かになるであらう。併し乍ら互に絡みあつてゐる社會的諸現象の原理的な關係が互に明らかであれば、その合法的な活動と形成とを原理的演釋的に誘導することができる。その次にはもうかの互に絡み合つてゐる諸現象の活動が進むにつれて實現してくる機能事實をほぐすことだけが問題である。例へば家庭の本質と根本作用とが確立されると、いはゞ家庭といふ社會的構造物の機能により、即ちその活動によつてなされるすべての原理的社會的な形成を演釋的に發展することができるといふことだけである。そこで今問題になるのはもうかの社會的構造物の根本原因の不斷なる活動を考究するといふことだけである。一旦發見した機能がその他の凡ゆる社會的機能に對して有する原理的な關係を確立すれば、結局一現象がその他すべての社

會的現象に對して有する悉皆の關連がわかる。この原理的な關連事項全體を誘導するのは演釋的になされるのであるが、他の社會的諸現象の機能的事實的經驗的な影響を確立することは本來歸納的にされなければならない。この關係全體(その中へ一の現象が現はれるのである)を原理的に純演釋的に誘導するにさへも實際上は歸納といふ道具を籍りないではできないであらう。如何なる點に於ても歸納の補助を籍りないですますことはできませんし又すべきものでもない。併し社會現象やその現象の傾向を演釋的に理解すること一言で云へばその現象を合理化し得るのは、その現象の概念を明かにする様な立場に立つてのみできることである。

著者は會々私生兒の統計的研究を行つて(次の書参照、「内縁關係より生じたるフランクフルト・アーン・マインに於ける人口に就いての研究」(„Untersuchungen über die uneheliche Bevölkerung von Frankfurt a. M.“, 1905 Dresden Verlag O. V. Böhmert) 本質概念と機能概念との方法論上の作用を検する機會を得た。殊に著者は内縁關係といふ機能概念によりて様々の種類の内縁現象を演釋的に發展することができた、そして之れに依つて、一定の與へられた統計的な數量を分けるべき任務を果たすのに最初から確かな目標が樹つて居つた。そこでこの内縁現象を機能的にみて、之を次の如く、即ちその内縁といふ概念から考へて社會體内の墮落といふことゝ結び付いてゐる人口更新の一種であると考えたから、自ら次の様な任務が生じて來た、それはかの人口更新の過程總體をば、それが行はれる

形式を悉く網羅して、それへできるだけ隙き間のない様に當て徹めるといふことである——之は取りも直さず内縁関係をばその機能を果たす度合に應じて配列するといふことである。殊にこのことから内縁關係に由來する所謂繼父の家庭、即ち（歸納的）研究の中へ現はれて來た總べての關係の中で正常な（Normal）世代更新の過程と極く接近した人口更新の一形態を發見するに至つた。

終りに尙注意して置きたいのは、余の友人博士ジエグフリード・クラウズ Dr. Siegfried Kraus が余とは獨立に社會科學的概念構成の中に於て同じ區別をなすことを發見した。彼の著書（そは本書と略同時に出版される筈であつたのだ）「欲望の社會科學的意味の認識」„Zur Erkenntnis der sozialwissenschaftlichen Bedeutung des Bedürfnisses”の中で歴史哲學の問題の内部に於て此の區別が徹底されてゐる。

譯者の言葉

茲に譯出したのは Othmar Spann の Friedrich Julius Neumann の誕辰七十年祝賀論文集(1905)に載せたる論文„Zur Logik der sozialwissenschaftlichen Begriffsbildung”の全部である。此の論文はその量に於ては決して大きいものとは云ひ得ないが、併しその内容に於ては相當に價値あるものと思ふ。Rickert の Grenzen (1902)が世に問はれて未だ數年ならぬ頃、社會科學に對して之だけの方法的寄與をなすのは、決して凡庸なる腕前ではできぬものである。併し乍ら Spann の概念論(Begriffslehre)に對して譯者は尙承服し得難いものを持つてゐる、併し今之を論じてゐる場合ではない。今茲には著書がいはんとしてゐることを那

語にてよく傳へ得たりや否やが問題である。譯者は此の翻譯の爲めに僅少ならざる時間を割いた併し果してその勤勞に對して相應するだけの成果を擧げ得たりや否やは之を讀者の月日に委するより外ない。譯者は之を邦語に移す爲に熟慮し、推稿することを自身に依つて値を拂はれてゐる、その他に何を求めんやである。

尚著者は此の論文を書きたる後更に次の論文を公にした。

Der logische Aufbau der Nationalökonomie und ihr Verhältnis zur Psychologie und zu den Naturwissenschaften,
in, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 1908.

譯者は此の論文の一部分に對しては之を閲讀するの機會を得たが未だその全部に涉つて通讀するの餘裕を有せず、従つてその論文の思想を茲に譯出せるもの夫れに就いて比較研究し、之を讀者の眼前に披瀝し得ざるのを衷心遺憾に思ふ。後の論文に就いては尙余に時を藉すの寛容を持たんことを切望する。

最後に此の翻譯を遂行するに當つて加へられたる教授北條、久川兩氏の助言及指教に俟つもの多い、茲に特記して深盡なる謝意を表明し以て擲筆する。

一九二六、一一、一六